

# 日本の研究グループによるオスティア・アンティカ調査

坂口 明 (日本大学)

私たちのオスティア・アンティカ研究グループは、歴史学、建築学、住居学、キリスト教トポグラフィなど、専門を異にする 8 名の研究者によって組織され、2008～2010 年度の科学研究費補助金（基盤 B「古代ローマ都市オスティア・アンティカの総合的研究」（研究代表者・坂口））を得て、3 年間にわたって共同研究をおこなっている。この間、毎年主に夏季に現地において、それぞれの専門的立場からオスティア遺跡を調査し、この遺跡の姿を多角的に明らかにしようと試みた。

構成メンバーは、以下のとおりである。

豊田浩志（上智大学・ローマ史）

毛利 晶（神戸大学・ローマ史）

堀 賀貴（九州大学・建築史）

黒田泰介（関東学院大学・都市計画・都市形成史）

片山伸也（日本女子大学・住居史）

加藤磨珠枝（立教大学・キリスト教トポグラフィ）

池口 守（別府大学・ローマ史）<sup>1)</sup>

坂口 明（日本大学・ローマ史）

共同研究の成果の一部は、以下の報告書に掲載されている。

Japanese Research Group of Ostia antica, *Report of the Investigation of Ostia antica in 2008*, Tokyo 2009

Japanese Research Group of Ostia antica, *Report of the Investigation of Ostia antica in 2009*, Tokyo 2010 (*Report 2009* と略記)

ここでは、各メンバーの研究の概要を紹介したい（堀氏はこのシンポジウムで報告されるので、それ以外のメンバーについて）。ただし、現在来年 3 月の **final report** の作成をめざして、各自の調査結果を分析しているところなので<sup>2)</sup>、各メンバーの研究の進展度にはばらつきがあり、この報告は現時点での経過報告ということになる。

豊田氏は、水周り、とくにトイレの構造と排水システムを調査した。その結果、以下のような点を指摘している。

1. 遺跡の残存状況から、一般に地上階に残るトイレが考察の対象とされているが、実は当時最適の居住部分とされていた 1 階（日本でいう 2 階）にトイレが設置されていた可能性があるのではないか。

例として、「天井画の家」(Insula delle volte dipinte. III v.1) があげられる。ここでは、1 階は 9 室からなり、その共同トイレ（固定便座・水洗型）が、1 階から 2 階への内部階段

手前にある。排出穴は直下型で、地上階の台所に這っている導水管で地下の下水道に連結していると思われる（図1）。この類例は、I iv.2 にも見られ、1階のトイレがほかにもあった可能性を示唆している（図2）。

上層階にトイレがあったことを示唆するものとして、ほかに *Casette Tipo* (III xiii.1) の西側外壁下にあるトラヴァーティン製構造物があり、これは上部からつながる下水管を支えていたのではないかと思われる（図3）。類例は、*Caseggiato del Pantomimo Apolausto* (I ii.2)、*Caseggiato del Balcone* (I ii.6)、IV iv.6 の3箇所、*Caseggiato del Temistocle* (V ix.2) にも見出される。

## 2. 公共浴場・大型泉水付近に常設の固定便座・常時流水型のトイレが多く見受けられる。

例として、*Casette Tipo* (III xiii.1-2) がある。これは、南北に細長い長屋形式の2棟の単立型住居で、それぞれの棟は、ほぼ同じ構造を持つ2区画に分かれている。それぞれの区画に独立のトイレ部屋（固定便座・常時流水型）があり、同一棟の隣室のトイレは背中合わせに設置されている。結果として、4個のトイレが東西の軸線に2列で並ぶことになり、トイレ溝の直下に大規模な下水道構造があったことが推定される。それを傍証するのが、西の「トリナクリア公共浴場」(*Terme della Trinacria*. III xvi.7) と、東の「7賢人の公共浴場」(*Terme dei Sette Sapienti*. III x.2) の存在で、大量の排水を処理する構造が *Casette Tipo* の下を貫通し、それがこの住宅の常時流水を可能にしていたと思われる。

同じことは、フォロの公共浴場 (*Terme del Foro*. I xii.6) の北に道を隔てて隣接する公衆便所 (*Forica*) および *Caseggiato dei triclini* (I xii.1) のトイレについてもいえる。同様な例は、公共浴場周辺の18箇所のトイレ、泉水に隣接した3箇所のトイレに確認される。

毛利氏は、共和政時代のオスティア、とくに宗教関係の遺構と遺物を調査した。遺物では、とくに紀元前4世紀ころからラティウムで大量に奉納され始めた、人体の一部をかたどったテラコッタ製の奉納品 *votivi anatomica* が、オスティアでも見つかったかに興味を持って調査したが、このタイプの奉納品は確認できなかった。オスティアで20世紀前半に発掘された遺物については、概して出土場所や出土状況についての正確な記録がなく、奉納品を手がかりとして宗教を研究することを難しくしている。そのような中で、ヘラクレス神殿付近で発見された「預言者ヘラクレス」のレリーフは、非常に貴重な資料といえる。なお、共和政時代の神域および *Quattro Tempietti* の神域と、ローマのテヴェレ川近くの一連の神殿との間に対応関係があることを、最近 A.-K. Rieger が指摘しているが、港・神殿・神域の関係と、ローマとローマ植民市の関係は非常に興味深く、今後この視点を念頭に置きつつ研究を深めていきたいと毛利氏は考えている<sup>3)</sup>。

黒田氏は、古代遺構の中世における転用再生を主眼として調査をおこなった。オスティア遺跡の近くにはボルゴとよばれる城壁に囲まれた町並みが存在するが、これは9世紀にオスティア市民をイスラム教徒海賊の襲撃から保護するために、教皇グレゴリウス4世が建設した防御集落を起源とする。その後、マルティウス5世が建設させた円形の塔は、ユリウス2世によって大規模な要塞へと改修され、ボルゴはテヴェレ川河口の河川交通をコントロールする基地としての役割を果たすようになった。

このボルゴが建設される際に、オスティアの水道橋（2世紀末～3世紀はじめ）が、アーチを埋め立てることによって市壁化された。黒田氏は、ボルゴの聖アウレア聖堂の横に立つ司教館の壁面に、水道橋の半円アーチ3つと水路の断面を確認した<sup>4)</sup>。

片山氏は、中世住居建築を専門とする立場から、オスティアの住居に関する調査をおこなった。オスティアの大きな特徴の一つである高層集合住宅（インストラ）と、イタリア中世都市にひろく見られるスキエラ型住宅（町屋型の集合住宅）とは、同じ集合住宅でありながら、かなり様相を異にしている。スキエラ型住宅は、中世後期の都市内の高密度に伴って現れ、共有構造壁によって居住空間が間口の狭い短冊状に分割されている（図4）。ローマ帝国支配下の富裕市民によって不動産投機の対象として建設されたインストラと、中世自治都市の統治システムが確立していく過渡期に自然発生的に建設されたスキエラ型住宅の空間構成を比較し、社会システムと住宅形式の関係を理解することが可能なのではないかと片山氏は考えている。

オスティアでの調査では、インストラの共有壁（図5）と非共有壁（図6）の特定をおこない、実測資料による建築類型学的比較分析をおこなっている。

加藤氏は、オスティアの芸術環境を大きく以下のような視点で評価する。すなわち、古代ローマの代表作として常に言及されるポンペイ壁画を「1世紀まで」のローマ絵画の展開をたどる重要な指標としてとらえる一方で、オスティアの最大の特徴を、それ以降も長く続いたローマ帝政期、古代末期から初期キリスト教時代の美術史・建築史の変遷をとどめる作例と捉えることである。とりわけ4世紀から6世紀の初期キリスト教徒の遺構を中心としながら、都市に共存していたローマの伝統宗教、ユダヤ教、ミトラス教などの東方密儀宗教の信仰集団の美術も視野に含めることで、単独の構造物や美術作品の枠を超え、広くそれを取り巻く都市環境における宗教美術の発展をたどる研究をめざす。

ミトラス教美術を一つの例としても、オスティアの浴場跡のミトラエウムで発見された「牛を屠るミトラス神像」（図7<sup>5)</sup>）は、通常の浮彫り形式ではなく、完全な丸彫り彫刻の神像を表わす貴重な作例と考えられているが、この躍動感に満ちた見事な人物表現、顔の表情などは、マケドニアのアレクサンドロス大王の肖像彫刻（図8, 9：ブルックリン美術館所蔵、紀元前1～後1世紀の制作）など、ヘレニズム美術の源流に遡るものである。こうした造形的特徴からは、ミトラス教がローマ社会においては、本来のイラン起源ではなく、ヘレニズム化された文脈で捉えられていたことを思わせる。またそれは同時に、初期キリスト教美術（図10：ヴァチカン美術館所蔵の《良き羊飼ひ》、4世紀前半）とも、共通の造形言語を有していたことが分かる。その一方で、この彫像が発見された浴場跡のミトラエウムの真上には、それをしりぞけるかのように、キリスト教徒の礼拝堂が4世紀後半から5世紀にかけて建設されていた（図11）。

加藤氏によれば、こうしたオスティアの建築的、美術的変遷を考察することは、たとえばシリアの商業都市で256年の陥落後砂漠に埋まったドゥーラ・エウロポスと同様に、ユダヤ教徒のシナゴークとキリスト教徒集会所、ミトラス教神殿など、さまざまな宗教的建造物が、都市の隣接区間に散在していたありさまを生き生きと描き出し、その芸術環境を

知る大きな手掛かりを提供すると考えられる。今後は各事例のより詳細な研究を続行する予定である。

池口氏は、食料の供給という観点からの調査をおこなった。一昨年の調査では、食料生産のための肥料供給という観点から、オスティアの屎尿処理、下水システムを検討したが、具体的な成果を得るには至らず、今年度からは、ローマの食糧の需要と供給の変動に、オスティアとポルトゥスの倉庫システムがどのように対応していたか、という視点から検討を進めている。

私自身は、オスティアに数多く見られた組合の施設 (*schola*) を主眼として調査をおこなった。帝政期のローマ都市では、同じ職業を持った市民や、同じ神を礼拝する市民、官吏仲間などが任意団体 (*collegia*, *corpora*) を結成し、活発な活動をおこなっていた。オスティアは組合についての史料が最も多い都市であり、そのスコラも約 20 が確認されている。ただし、組合の施設と一口に言っても、集会、宴会、宗教的祭儀などの多様な機能を持っており、施設ごとに中心的な機能は異なる。これらを、組合の性格、時代的背景と関連付けて分類しようと試みているが、いまだ明確な結果を得るにはいたっていない<sup>6)</sup>。

ただ、この作業を進める過程で、オスティアのスコラの中でも最も壮麗な「トラヤヌスのスコラ」(*Schola del Traiano*. IV v.15, 図 12) を本拠としていた組合について、従来の定説を修正する必要があるのではないかと考えるに至った。一般には、このスコラは船大工 (*fabri navales*) のものと考えられているが、その根拠は、デクマヌス・マクシムスを挟んで船大工の神殿 (*Tempio dei fabri navales*. III ii.2) の向かい側に立っているということであり、確実とはいえないものである。この建物は、2 世紀なかばに建てられたと考えられており、3 世紀には大規模な増築がおこなわれている。また船大工の神殿は、2 世紀末の建造である。トラヤヌスのスコラが船大工のものであったとすれば、この組合は次々に施設を拡充する必要性と資金をもった強力な組合であったことになる。

一方、オスティアの船大工の組合の名簿 (*H. Bloch, NSA ser.8, vol.7, no.43*) とポルトゥスの船大工のそれ (*CIL xiv.169*) を分析すると、帝政初期にはオスティアにあった国家のドックが、クラウディウスによる新しい港の建設以後ポルトゥスに移されたことが推定できる。それ以後は、ポルトゥスの組合のほうが圧倒的に繁栄し、オスティアの組合はむしろ停滞あるいは衰退の中にあっただと思われる。これは、上に述べたトラヤヌスのスコラの組合像とは合致しない。このスコラを持っていた組合としては、現段階ではオスティアの船主 (*navicularii*) の組合が最も有力であると思われる。

この仮説を、先にあげた 2009 年の報告書に発表したところ<sup>7)</sup>、Delain さんから、トラヤヌスのスコラ建造の年代についての最新の説を参照していない、スコラの所有者を船主とする説には再検討が必要であるというご批判をいただいた。前者については、私の不注意によるもので、ご指摘を感謝したい。ただ、新しい推定年代 (3 世紀はじめ) を受け入れたとしても、私の論旨自体を変更する必要はないと考えている。後者に関しては、私も今後検討を重ねていきたいと考えている。

以上、私たちのグループによる調査・研究の概要を紹介した。ご覧のように、現在のところ各自の研究はばらばらなままにとどまっているが、新たな知見も多く見出されており、今後さらにデータの分析や相互検証によって総合的な成果をあげることを目指している。

なおこの共同研究は、2010～2012 年度科学研究費補助金 基盤 (B)「古代イタリア半島港湾都市の地政学的研究 (研究代表者: 上智大学 豊田浩志) に受け継がれており、対象を広げてさらに発展させていく予定である。

- 1) 現在の所属は久留米大学。
- 2) この報告書は、Japanese Research Group of Ostia antica, *Report of the Investigation of Ostia antica 2008-2010*, Tokyo 2012 (Report 2008-2010 と略記) として発行された。
- 3) Cf. *Report 2008-2010*, pp.19-26.
- 4) 13 日の上智大学におけるシンポジウムで報告がおこなわれた。本報告書の pp.
- 5) ミトラエウムの写真。ここに置かれているのはコピーで、実物はオスティア博物館にある。
- 6) 一応のまとめとして、*Report 2008-2010*, pp.1-10.
- 7) *Report 2009*, pp.1-10.

図 1



图 2



图 3



图 4

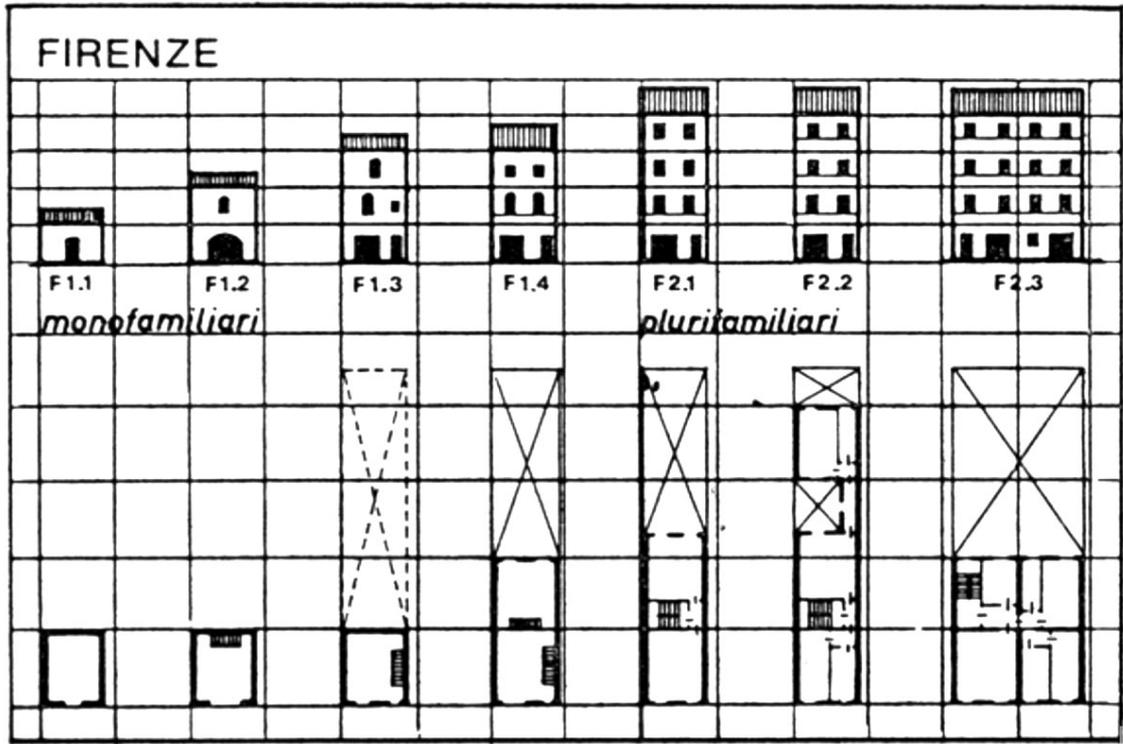


图 5



図 6



時 7



图 8



图 9

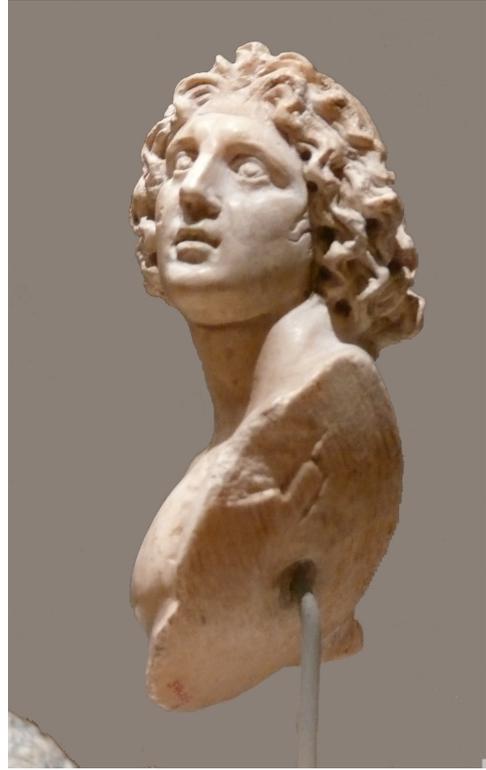


图 10



图 11

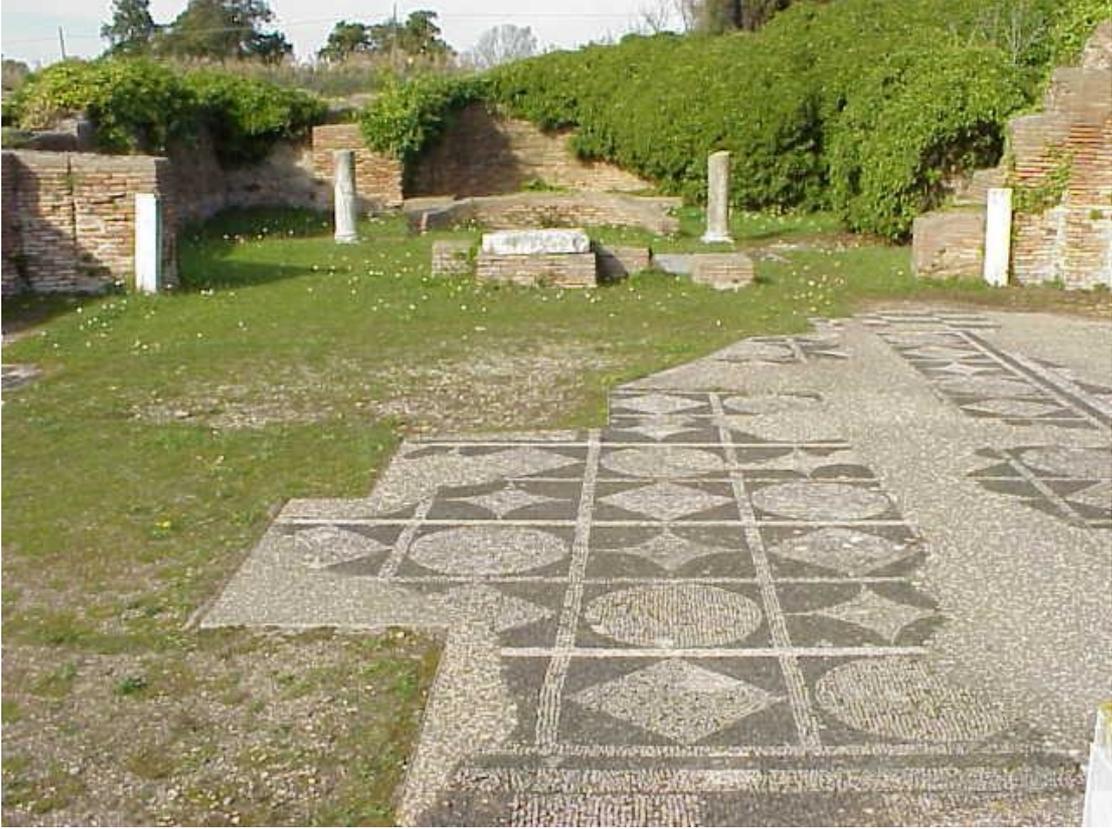


图 12

